

第47回日本高次脳機能障害学会に参加して

言語聴覚学専攻 専攻長 塚本 能三

本学会は10月28日・29日仙台国際センターで開催された。学会長は東北大学大学院の鈴木匡子教授、テーマは「ひろがる つながる 高次脳機能障害」、進むべき方向をあらためて考えるきっかけを作る、ということがコンセプトであった。具体的には「ひろがる」企画として高次脳機能障害に関わる基礎的な研究と臨床的な研究の関係を見つめる「基礎からの視点、臨床からの視点」で「時間の感覚」、「空間の感覚」、高次脳機能障害に対する新たな技術の応用を知る「病態別 高次脳機能障害の診断・治療の最前線」で脳卒中と頭部外傷について取り上げられた。「つながる」企画では「高次脳機能障害者を支える」ワークショップの中で当事者、関連職種による密な意見交換がなされた。さらに「公募シンポジウム」では「高次脳機能障害の診断をめぐる一様な立場からの提言」「臨床神経心理士になろう！」「小児高次脳機能障害の現状とこれから」「脳卒中と高次脳機能障害」の4つがシンポジウムとして取り上げられた。

我々は一般演題の部において以下の3題を発表した。

まず1題目は「バリエーション症候群を呈した孤発性クロイツフェルト・ヤコブ病を疑われた症例」、筆頭演者は若草第一病院の今村茜STであった。本発表の注目すべきことは、クロイツフェルト・ヤコブ病では視覚異常からの発症の報告はあるが、バリエーション症候群によるものは希少であること(本邦では初)、また、死亡に至るまでに、関わった期間がわずか1週間であるのに詳細に評価を行えたことはSTとして襟を正すべき症例であったと考えられることである。

2題目は本校の院生である中谷病院の青木健太STが筆頭演者であった。テーマは「左側頭葉損傷による健忘失語 -優れた計算能力が保持された1例」であった。本例の特徴は珠算者の暗算のメカニズムが非珠算者の暗算のメカニズムと異なることを実症例により明らかにしたことであった。今後、論文へと結びつく内容であった。詳細については青木院生からの報告を参照していただきたい。

3題目は「小脳出血により失読失書が生じた1例」、わかさ竜岡リハビリテーション病院の勝田有梨STによる発表であった。小脳病変による高次脳機能障害の報告は最近になって蓄積されている。失語症、失書が主たる報告であるが、本例の報告は失読失書を生じたという過去に報告例のない内容であった。それ故、発現機序の考察には骨を折ったが、今後の症例の蓄積に一石を投じたものと我々は自負している。

学会発表するために、文献収集は勿論、事前に電話、メール、筆頭演者の勤務先や、本校での打ち合わせを重ね発表の全体がまとまっていく。生みの苦しみの期間である。その過程が楽しみでもある。楽しみは発表だけでは終わらない。前日に現地に集合して開催する前夜祭である。今年も仙台の居酒屋に4名が集まり、高次脳機能障害と美味しい料理を肴に和気あいあいと語り合った。筆者にとっては若手のSTが高次脳機能について生き生きと話す姿、これこそが最高の肴である。新年も可能な限りお手伝いをしたいと密かに思っている今日この頃である。